

特別展「珠・玉・球 ― 私たちを魅了する たま とは ―」

とっておき埋文講座①

令和3年度の特別展は「玉（身を飾るアクセサリ）」をテーマとしました。意外と知られていないのですが、富山は縄文時代早期末～古墳時代中期（約7,000～1,500年前）にかけて、玉をたくさん作ってきた地域です。なぜ富山でこんなにも玉が作られるようになったのでしょうか？考えてみましょう。



展示の様子

① 豊富な石材

ほとんどの玉は石を材料として作られますが、よく使われるのがヒスイと滑石です。

ヒスイは糸魚川市で産出し、そこから流れたものが富山県東部の沿岸に漂着します。宮崎・境海岸（朝日町）は現在でも拾うことができ、ヒスイ海岸の愛称で知られています。県内で滑石の産出地は見つかっていませんが、馬場山G遺跡（朝日町）で原石が出土し、明石A遺跡（朝日町）や極楽寺遺跡



極楽寺遺跡出土品

（上市町）で滑石製袈裟状耳飾が作られていることから、県東部のどこかで産出するようです。

また、弥生時代の管玉には、緑色凝灰岩（碧玉）と赤色の鉄石英が使われました。どちらも小矢部川流域の河原で採集することができます。このように富山は玉の材料が豊富にとれる地域だったのです。

② 加工する技術があった

ヒスイの利用は縄文時代前期（約6,000年前）にはじまり、小竹貝塚（富山市）からは、ヒスイ垂飾の未成品が出土しています。明るい緑色でよく磨



ヒスイ垂飾未成品（小竹貝塚）



ヒスイ大珠未成品（馬場山G遺跡）

かれています。世界最古のヒスイの玉だという研究者もいます。

中期（約5,000年前）になると、ヒスイ海岸沿いの丘陵部でヒスイの玉づくりが本格的に始まります。馬場山G遺跡（朝日町）では、日本最古のヒスイ工房が見つかっており、その中からヒスイ大珠の未成品が出土しています。穿孔途中のもので、凹んだ部分がツルツルになっています。この遺跡では磨製石斧やその未成品、加工道具（敲石・擦切石器・砥石）も出土しています。この道具は玉作りにも使われていることから、磨製石斧の石材（硬い蛇紋岩）を加工するのが得意だった縄文人が、その技術を応用して、ヒスイを加工するようになったと考えられています。もちろん、前期からの玉を作る技術も継承されていたことでしょう。

ヒスイを加工する技術はどんどん洗練され、中期中葉～後期前葉（約5,000～4,000年前）には大珠という大型の玉、後期～晩期（約4,500～3,000年前）には丸玉・勾玉といった小さな玉を作るようになります。いずれもよく磨かれ、縄文人を魅了したヒスイの美を今に伝えています。

③ 道具を工夫して効率化をした

縄文中期の玉作りの道具は、磨製石斧のそれとははっきりと分かれていませんでしたが、後期・晩期になると専用の道具も使うようになります。筋砥石は丸玉や勾玉など小さな玉の形を整えるために使う砥石で、その痕跡が表面にいくつもの筋状の溝として残っています。

弥生時代になると、大陸に由来のある管玉を作ようになります。管玉は、細長い円柱状の石に孔をあけた管状の玉で、弥生中期(約2,000年前)に富山に伝わります。縄文時代の玉と比べると、その孔はとても小さいことに気づきます。

この孔をあけるためには極細の錐きりが必要で、はじめ石針いしはりを使います。石針は錐の先端(錐先)にとりつける道具で、主に安山岩を材料にします。石名瀬A遺跡(高岡市)では、石針の未成品が管玉とともに出土しているので、玉作りのムラで作っていたようです。玉作りに並行して、幅0.5~1mmの細さの石針を作るのは大変だったと思われます。その後、後期(約1,800年前)になって鉄が伝わり、錐先を鉄に変えます(鉄錐)。石針作りから解放されて安堵した弥生人の姿が目浮かびようです。鉄錐は下老子笹川遺跡(高岡市)で出土しています。



石針(錐先拡大)



鉄錐

④ 人々を魅了し続けたヒスイ

話をヒスイに戻しますが、ヒスイは弥生・古墳時代にも玉の素材として重宝されます。弥生時代後期の^{かこいやま}畠山遺跡

^{えがみ}や江上A遺跡で出土したヒスイ勾玉は、半透明な緑色をしており、富山県を代表する美しいものです。

古墳時代にはヒスイ海岸で再び玉作りが行われるようになります(^{はまやま}浜山遺跡)。ヒスイに溝を彫って分割する技法は「浜山技法」と呼ばれ、全国で初めてヒスイ勾玉の加工工程が判明したものとして有名です。古墳から出土するヒスイ勾玉は、透明感が無いものが多くなりますが、光沢が出るまでよく磨かれています。

今回の特別展で展示した美しいヒスイの玉を見ると、「玉」が約5,000年にわたって人々を魅了し続けた理由がお分かりいただけるのではないのでしょうか？

「たま」にまつわる遊び

富山の玉作りは古墳時代で途絶えますが、中世~近代には名前に「たま」がつく遺物が出土することがあります。料理に使う「お玉」や、火縄銃の「鉛玉」^{そろばん}、「算盤玉」^{じゆず}、「数珠玉」など生活の道具のほか、「羽子板」や「将棋」、「囲碁」などの遊びで使う道具にまつわる「たま」も展示しています。終戦まで陸軍演習場があった^{たてのがはら}立野原近辺では、ライフルの^{たま}弾のほか、大砲の^{だんとう}弾頭に使われた信管も出土しています。

展示の最後には「たま」にまつわる遊びとして、小学生も楽しめるコーナーを用意しました。「まとあて」コーナーでは、年配の方には懐かしい「銀玉鉄砲」と空気鉄砲の原理を応用した「大砲」。「昔のあそび」コーナーでは、「けん玉」と「お手玉」。うらないコーナーでは、「ガラス玉」を使った占いを用意しています。また、展示の学習の補足として、ヒスイの硬さが学べる「孔あけ」コーナーやヒスイ海岸で拾え、磨製石斧の材料となった蛇紋岩を採るコーナーもあります(磁石にくっつく性質があります)。



「まとあて」コーナー

3Dでさらに探究

玉は小さく、イメージがしづらいので、マネキンを使った立体展示もあります。博物館実習生に作成していただきました。

さらに、3Dモデルを利用して動画を作成しました。展示では紹介しきれなかった鑑賞のポイント、アニメーションを使った玉作りの様子などの動画10本です。普通は見られない展示品の裏側も、3Dモデルなら見ることができます。

(松井 広信)



マネキンの立体展示(縄文前期)



3Dモデルを利用した動画